

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 22 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530701

研究課題名（和文） 1・2歳児の“自己”の発達の生態学的研究

研究課題名（英文） Ecological study of the “self” development of a child of in the second and the third year.

研究代表者

麻生 武 (ASAO TAKESHI)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：70184132

研究成果の概要（和文）：研究成果は大きく分けて2つある。1つは、対象乳児Uの生後2年目の手書きの縦断的日誌観察データを、デジタル化して、約20のテーマに分けてファイル化したことである。これによって、「自己の発達」に関する、周辺テーマを含めた総合的な研究を行うことが可能になった。もう1つは、そのようにテーマごとに整理されたデータを利用して、「自己の発達」に関する、具体的な研究を行ったことである。その成果は、細分化すると3つに分けることができる。1つ目は「イタイ」ということばの獲得をめぐる理論的な問題をまとめ、学会発表や論文にまとめたことである。2つ目は、生後2年目に子どもが「他者」に出会っていくプロセスを、今回整理したデータを利用して論文化したことである。3つ目は、子どもが他称詞や自称詞を獲得していくプロセスについて、学会発表し論文化したことである。「呼び名」としての他称詞と「対象の名前」としての他称詞との間にあるギャップや、「自分の名前」を子どもが口にすることの意味など、生後2年目の“自己”をめぐる新たな謎を浮かびあがらせることができた。

研究成果の概要（英文）：The results of the study are divided into two parts. One part is the data processing and data classification. The handwriting longitudinal dairy observation data of a child in the second year are transformed into digital ones and classified into 20 themes. By these works, we can study the self development of the child in the second year from multiple view points. The other part is consists of three concrete studies by these data. The first is the study about the acquisition of the word of pain “イタイ(itai)”. The second is the study about the experiences of the child to meet “others” in the second year. The third is the study about the acquisition of the word of parents’ names “トータン(tootann)” and “タータン(taatann)” and the self name. It is discussed that the calling name is not necessarily the same as the referent name and learning the former is not the same task as learning the latter. For the self name, to utter it properly is not necessarily to understand it. These three studies are also published.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1400,000	420,000	1820,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：自己、1歳児、人称詞、内的状態、コミュニケーション、縦断的日誌研究

## 1. 研究開始当初の背景

1980年に「子どもの他者理解」(心理学評論)というレビュー論文を執筆したのがそもそもの始まりである。そこで、私は子どもの他者の視座理解や感情理解を生後1年目後半から始まる「情動反応としての理解」、1歳半頃から始まる「振る舞いとしての理解」、2歳半ころから始まる「感情移入としての理解」、4~5歳から始まる「概念的理解」とに区分し、それぞれの理解についての明らかにされていることを整理した。その際、残された問題はそのような4つのタイプの理解の移行プロセスを解明することであった。そのためには日常的な場面での現実の子どもの縦断的で生態学的な観察が必要であると指摘したのである。それを行うには予想したより多くの時間がかかった。そのような乳児の縦断的観察を始めたのが1981年である。その年に誕生した第1子Uと、甥Nとの縦断的観察を始めたのである。前者に関しては日々観察を行えたが、後者に関しては平均1ヶ月に1~2度ほどの頻度でNが2歳7ヶ月まで観察を行った。1984年に第2子Yが誕生し、その縦断的観察も行うことになった。今回の研究対象は、現在2歳2ヶ月のYの第1子も含めて以上の4名である。プレマックらがチンパンジーの他者理解に「心の理論」のタームを使ったのは1978年であるが、最初にこの用語を幼児に用いたのはブリザートン(1981)である。そして「心の理論」の研究が流行し始めるのは自閉症に関する一連の研究を Baron-Cohen たちが始めた1985年からである。先に挙げた私の拙論「子どもの他者理解」は、いわゆる「心の理論」が流行する以前であった。爆発的に流行していく「心の理論」の研究には、大きな歪みが存在していた。それを指摘したのが拙論『「心の理論」の隠れた哲学』(渡邊他編『心理学の哲学』北大路書房2002, pp.324-338.)である。その要旨を簡単にまとめると、「子どもの“自己”と“他者”とがどのように形成されているのかそれを論じず、『心の理論』の議論の多くは、“自己”と“他者”とを前提にしてしまっているという批判である。必要なことは子どもの日常生活の縦断的観察データから“自己”と“他者”との形成を解き明かすことである。重要なことは模倣やコミュニケーションの詳細な分析なのである。生後1年目に関してそれを行ったのが拙著『身ぶりからことばへ』(新曜社1992)である。その結論は、生後1年

目の終わり頃に“自己”と“他者”とが同型的に組織化されるということであった。現在「心の理論」の研究は生後1年目の乳幼児期に遡って議論されるようになってきている(M. Legerstee, 2005 など)。また生後2年目に関する「心の理論」に関する興味深い実験的研究なども存在する(Repacholi, B.M. & Gopnik, 1997 など)。現在の「心の理論」の研究は、かつて私が「子どもの他者理解」で指し示した方向と重なりつつある。「誤信念課題」といった人工的な課題の成績が問題ではなく、子どもたちの“自己”理解や“他者”理解のすべてが重要なのである。鏡像の自己像理解や自称詞の使い方やふり遊び(Lewis, M. & Ramsay, D., 2004)や他者の注意の理解(Tomasello 他, 2003)や共同作業(Herrmann 他, 2006)や模倣の問題(Carpenter 他, 2005)や視座理解(Moll, H. & Tomasello, M., 2006)など実にさまざまな現象が子どもの“自己”と“他者”の形成に密接に関連しあっているのである。「心の理論」の形成の問題は、そのような子どものあらゆる“自己”“他者”理解の現象をトータルに扱うことによって初めて全体像を描くことが可能になると言えるだろう。さまざまな実験結果を踏まえつつも、日常生活のなかで子どもがどのように他者と交流し、自己を認識し、また自己を主張し行動しているのか、意図理解・言語理解・文脈理解・模倣・ふり・ゲームなどあらゆる現象をトータルに視野に入れて、子どもの“自己”と“他者”の形成の詳細を論じ、そのプロセスを記述的に解明するのが今回の研究目標である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、1・2歳児の“自己”の発達を日誌的観察法による詳細な観察データを基に、立体的に描き出すことにある。この時期の“自己”の発達は、言語は発達や対人関係の発達が、きわめて個性的プロセスをたどると同様個性的な展開が予想される。しかし、そのような克明で個性的な発達の様相の詳細な記述はまだなされていない。トマセロが子どもの動詞の言語発達研究において、「島仮説」を見出したように、個性的で個別的な生態学的観察研究からある種の一般性を見出すことが求められる。それを目指すのが今回の研究目的である。つまり、縦断的観察データをもとに、これまで筆者が素描してきた“自己”の発達プロセスをさらに克明に

描き、一步進めた理論を提案することにある。最終目標としては1992年に出版した『身ぶりからことばへ』の続編を書くことを目指している。そのためには、まず生後2年目だけで400字原稿用紙で10000枚を越える、縦断的な手書きの日誌データを、ワープロのデジタル情報に入力し、それを「自己」「模倣」「共感」「物語」など20ほどのテーマに仕分けして、個々のテーマについて分析して行く準備をしなければならない。それを行い、分類仕分けされたデータを、月齢毎に整理し“自己”の発達を、多視点な観点から議論するのが研究の第一ステップの具体的な目的となる。

### 3. 研究の方法

31年前に記録された筆者の長男Uに関する手書きの日誌的観察記録（筆者のものがB5サイズのノート2016頁分と妻の記録774頁分になる）をワープロに入力し、20のテーマに分けてテーマ毎のファイルを作成する。作成されたテーマに関して、そのデータを整理し、「自己」の発達について、関連研究を踏まえて理論的に議論を行う。中心のターゲットになる幼児は、筆者の長男であるが、同年齢の子どもたちの観察でそれを補足する作業も行う。

### 4. 研究成果

当初、長男Uの観察記録の生後2年目と3年目を処理することを目ざしたが、膨大な作業量になり、今回の期間では生後2年目の手書きデータをデジタル化し、それを20のテーマにファイル別に分類する作業を完了するのが精一杯であった。研究成果は3つの論文として発表を行った。まず、以下にその内容をコンパクトに示す。

(1)「イタイ」ということばの獲得の謎：この研究では、子どもがイタイということばを獲得することを、「子どもはそれを生活スタイルと共に学んだのだ」「イタイ」ということばは、痛くて泣き叫ぶ行動が、「イタイ」と叫ぶ“新しい痛み行動”に置き換わったにすぎない」とするウィットゲンシュタインの議論の不十分さを、そもそもなぜ「痛み」を表出する必要があるかとの、問題意識から、進化生物学的な議論を行った。動物（有機体）が「痛み（有害な侵害刺激）」を感知するのは、身体を侵害する有害刺激から身を避け自分の身体を守るためである。「侵害受容器」は、当の動物が有害な刺激を避け、身体を保全するのに適合した形で進化してきたと言えるだろう。植物、ゾウリムシ、昆虫、魚類、鳥類、哺乳類、ヒト、「痛み」を感じるのは、どのレベルからなのだろうか。また有害刺激から反射的に手を引っ込めたりする際には、

その瞬間は私たちは「痛み」を感じず、後から「痛み」を感じることもある。だとすると、有害な侵害刺激を感知し、それを回避する反応をすることと、「痛み」を感じることを区別する必要がでてくる。回避反応だけでは不十分だとすれば、では、何をもって他の個体の「痛み」を理解すればよいのだろうか。有害刺激から逃れようとしている単細胞生物であるゾウリムシの姿を見ても、私たちはゾウリムシが恐怖を感じているとも痛みを感じているとも思いはしない。その理由の一つは、ゾウリムシには、苦痛の情動表出がないからである。同様に、魚や爬虫類や鳥類にも表情や情動表出がない。よって、一般には彼らには感情や情動といったものはないとされている。ある個体が「痛み」を感じていると私たちが確信するには、その個体が「痛み」を表出していることが必要なのである。では、どのような動物が「痛み」を表出するのだろうか。ヒトや霊長類など一部のものをのぞいて、哺乳類の成体（大人）はほとんど「痛み」の表出を行わない。弱肉強食の世界では、「痛み」を表出してよいことなど基本的に存在しないと言える。それでは、なぜ「痛み」が表出されるのだろうか。たとえば熱いストーブに手をふれ、手をすばやく引っ込めることは生命体にとって合理的な行動である。しかし、なぜ「ギャー!」「アチャー!」などと騒ぎたてアピールする必要があるのだろうか?論理的に考えて、個体が「痛み」を表出することによって利益が得られるためには、次の二つの条件が満たされていなければならない。一つは、その表出が他の仲間のメンバーにとって有意味なサインとして機能することである。もう一つの条件は、個体Aの「痛み」の表出を感知した他の個体Bが、個体Aの「痛み」をもたらした侵害刺激を除去するような活動することである。個体Bが個体Aの「痛み」を緩和させるような行動をとることは、「痛み」の表出行動が最初から狙っていることである。その起源を考えれば「イタイ!（侵害刺激に対する悲鳴）」という表出は「ママ、助けて!」というシグナルから発したと考えるのが妥当だろう。では、なぜヒトは大人になっても「イタイ!」と騒ぐのか。それは、ヒトのもつネオテニー的な特徴だと言えるのかもしれない。確かに有害刺激に襲われているような状況で、「イタイ!」と叫んだり、悲鳴をあげている個体は、「痛み」を感じているとあってよいだろう。だが、それは本来、他の個体へのアピールなのである。だとすれば、子どもにしる大人にしる、はたして大きな悲鳴をあげている者ほど、より大きな「痛み」を感じていると判断してよいのだろうか。「ママ、助け

て！」の声の大きさは、「痛み」の大きさではなく「(保護者への)依存」の大きさを示しているといった方がよいのではないだろうか。「痛み」の表出は、必ずしも感知されている「痛み」の大きさと内的に関連しているわけではないのである。

(2) 子どもは「父や母」という人称語をどのように獲得するのか?: 生後8ヶ月頃から1歳4ヶ月までの間に、長男が「父さん」「母さん」ということばを理解し、また自分でも「トータン」「タータン」との声を発するようになるのか、日誌的なデータから細かく分析を行った。その結果、次のようなことが明らかになった。人称語の理解と産出は、一見無関係にそれぞれ発達していくようにも見えなくはない。だが、そこには相互媒介的な関係が存在している。「お父ちゃん起こしておいで」「お母ちゃんはどこ？」などのことばの理解は、早くも生後8ヶ月頃から見られ、日常の文脈の中で「お父ちゃん」「お母ちゃん」ということばを理解することは生後1年目に確かなものになっている。人称語の理解で困難であったのは、「お父ちゃん」「お母ちゃん」というものをある「共同化された」対象(麻生, 1992)として捉えるということである。「お父ちゃんはどこ？」でFを指差すといったエピソードが1歳0ヶ月17日に観察されているものの、孤立したエピソードに留まっている。「お父ちゃん」「お母ちゃん」がそのような対象として明確に理解されるようになるのは、私たちが「お父ちゃんどこ?」「お母ちゃんどこ?」などFやMを同定させるゲームを行うようになってからと言えるだろう。1歳2ヶ月26日頃から私たちはこのゲームを始めている。その成果で1歳3ヶ月には、Uは「お父ちゃんはどこ?」などの質問に7割方正しく指し示せるようになってきている。だが同じ時期、M(母親)の同定に関しては理解にまだ曖昧さが伴っている。Uの「お父ちゃん」の実物理解を踏まえて、Mは1歳3ヶ月21日から写真のF(父親)を「お父ちゃん」と指差し教えるようになってきている。その後、Fに関しては写真であれ実物であれUは「お父ちゃん」を対象としてほぼ確実に理解できるようになっている。1歳3ヶ月27日、私たちは、Uの発音の揺れを解消するためにFのこと「トータン」Mのことを「タータン」と呼ばせようという方針を立てる。その成果もあり、1歳4ヶ月には、Uは「お母ちゃん」「お父ちゃん」と呼ばれるものを、それぞれの所有物・鏡像・写真なども含んで広く理解できるようになっている。興味深いのは、対象として「お母ちゃん」「お父ちゃん」の理解が明確になったとき、「お父ちゃん」「お母ちゃん」なるものが絵本の中の人物や他児の母親などにも拡張して理解されるようになってきている

ことである。Uが産出に関して越えて行かなければならないハードルは3つあった。1つ目は「お母ちゃん」「お父ちゃん」に該当する発声を、自己にとっても他者にとっても弁別できるように、ある安定した恒常的音声パターンで発することである。2つ目は、自分の発する音声と親の発する音声との翻訳的「対応」関係を親子共に認識することである。つまりUの語彙の中の「チャーチャン」は、大人の語彙の「お母ちゃん」に対応していることを双方が認識していなければならない。3つ目は、「呼びかけ」発声から「同定する名指し」発声へと、「お父ちゃん」「お母ちゃん」に該当する発声の機能を拡大することである。Uの場合、まず困難であったのは、1つ目のハードルであった。Uの構音の発達が未熟でゆっくりしていたため、「お父ちゃん」「お母ちゃん」に該当すると思われる発音が常に揺れ、なかなか安定したパターンにならなかった。そのため必然的に2つ目の困難を引き寄せることになった。例えば、私たちの「お父ちゃん」という発話に、Uがきれいに「オトーチャン」と音声模倣できる構音力があれば、問題はいたって単純になる。それは、私たちの「お父ちゃん」=Uの「オトーチャン」であることが、Uにとっても私たちににとっても明らかになるからである。そのような場合、2つ目のハードルは最初からないといつてよいだろう。ところが、Uの場合そうではなかった。「オチャーチャー」や「ターチャ」など私たちを見つめて発するUの声が、いったい何を意味しているのか常に呼びかけられている私たちの解釈にかかっているのである。呼びかけられているのは確かである。分からないのは「ちょっと、ちょっと!!」と呼びかけられているのか「あんた、そこのあんた!!」あるいは「お父ちゃん!!」と呼び掛けられているのか判然としないことである。もちろん私たちはそのような多くの場合、「お父ちゃん」あるいは「お母ちゃん」と呼びかけられているものとして応答したのではあるが、事実は藪の中である。おそらくこのことが3つ目のハードルとも深く関係している。対象としての「お父ちゃん」理解がしだいに明確化していく1歳3ヶ月頃に、「同定する名指し」が自発している。しかし、その後、そのような「同定する名指し」が定着していくには、1歳3ヶ月21日から、Mが写真のFを教育的に「お父ちゃん」と教え込んだように、教育的な働きかけが必要だった。Fの写真を「お父ちゃん」と名指し、子どもに模倣させることは、2つ目のハードルを越えさせるためにも有効な方法だと言えるだろう。ただし、この時期、Uの「お父ちゃん」に対する「呼びかけ」発声と「同定する名指し」発声とは必ずしも一致していない。呼びかけて同時にFの鼻を押さえると

いった「呼びかけ」と「同定する名指し」とをみごとに統合するような発話が生まれるようになるのは1歳4ヶ月になってからである。モノを差し出し命令するような「呼びかけ」発話は、早くも1歳1ヶ月には明確になっている。しかし、そこから「同定的する名指し」発話が誕生するには、2ヶ月以上の時間がかかっている。その間にUが行ったのは、まずFを「お父ちゃん」という対象として理解することであった。まずFを「お父ちゃん」という指し示す対象として理解する。そこから「お父ちゃん」に該当する自分の発声で、Fを「同定的に名指し」する道が開かれていくのだと言えるだろう。「産出(呼びかけ)」は「理解(対象同定)」を経て新たな「産出(名指し)」へと発達するのである。また、「呼びかけ」から「名指し」へ、曖昧な発声から父や母の人称語が生成していくプロセスには、周囲の大人の深い関与が絡んでいることを具体的に示し得たことも、本論の成果である。

(3) 子ども社会への道：生後2年目における「他者」との出会い：生後2年目、子どもは初めて「他者」に出会う。生後1年目、子どもは「他者」に出会うことはない。それは、まだ「他者」に出会えるような「自己」を持たないからである。「他者」に出会うには、「他者」と「自己」とが基本的に同型的な構造をもち、媒介となる第三項(の認識)を共有できるようになっている必要があるのである。1歳の誕生日前後、Uはそのような水準に達することができていた。しかし、そこで作られていた「自己」はそれまで深くコミュニケーションしてきた母親や父親といった大人の養育者を鏡にして作られてきたものに過ぎない。そこで生まれた「他者」は、そこで生まれた「自己」と双子の兄弟である。そこには異質なものがない。他児は、子どもが今まで知っていた「他者」(大人)とはまったく異なる奇妙な存在なのである。この「他者」は、子どもに分かることばをかけてくれもしなければ、予想したような行動を取ることも少ない。他児は、ときには子どもの領域にズカズカと侵入しモノを奪い、ときには興味深い事物操作をして子どもの興味を惹きつける何か得体の知れない存在である。子どもは次第に、公園で遭遇したりする(同年齢あるいは年長の)他児がどこか「自己」に似たものであると感じ始める。Uの場合、それは1歳4ヶ月から5ヶ月頃であったように思われる。この頃から、年長児に関心を示すということが顕著になり、他児と偶然的で刹那的な場であれ、相互模倣的に、快の情動でその場を祝祭的な共有の場にするのが可能になっている。他児を自分と似た存在と感じられるようになるや、年長の他児はとも魅力的な存在になっていく。お兄ちゃん

お姉ちゃんに対するあこがれは、きわめて顕著である。では、Uが2ヶ月年下のマナブ君となぜ親しかったのか。その原因の一つは、マナブ君の発音がUよりはるかに洗練されスムーズであったことにもよる。ある意味で、Uはマナブ君に一目置いていたと言える。1歳10ヶ月25日、マナブ君がMと玩具の電話で上手に対話しているのをじっと聞いていたUは、このやり取りが終わるやまるで自信を喪失したように「ガッコ(だっこ)」と言ってMの膝の上ののりMにしがみついている。マナブ君はマナブ君で、よくしゃべるUのことをある意味で尊敬していたようである。自分はきれいな発音で言えるのにもかかわらず、Uの「ジージ(くるま)」「ポット(もつと)」などの音声を模倣している。マナブ君(1;6, 29)は、Uからモノを奪うときに「デューチャンも!」と発声している。これはUが「デューチャンモ(Uちゃんも)」「デューチャンノ(Uちゃんのもの)」と要求する音声の模倣であった。マナブ君は「デューチャン」の発話がUの名前であるとまったく気づいていなかったのである。U(1;10, 11)は、小学3年生の女の子がスリッパを履いているのに気づき、Mの履いていたスリッパを脱がせて自分ではき、「ニータンイッチョ(お兄ちゃんと一緒)」と言っている。年長児のようにになりたい、子どもはそのような強い願望をもって育つのだと言えるだろう。一般に、1歳半頃から子どもは他者から自分に向けてされた行動を模倣し、それを別の他者に対して行うなど、受動体験を能動体験に置き換えることができるようになる(麻生, 1980)。Uの場合もそうであった(麻生, 2008)。自分を攻撃してくる年長児の態度を、どうやって反転させて自分の態度として自分のものとしていくのか、それは辛い体験ではあるが、必ず子どもが乗り越えていかなければならない修練だと言えるだろう。受け身の体験を、能動の体験に置き換えていくこと、そのようにして他者の態度を自分のものにしていくことによって子どもの世界は大きくなっていくのである。年長の「いじめっ子」に恐怖しつつも魅力的に感じ、「いじめられ体験」を「いじめ体験」へと内化して、その子の態度を自分の「自己」の中に組み込み、新たな「自己」を生成させていく。そのようなプロセスが、「他者」と出会い始めた生後2年目後半に生じているのである。

(4) その他：自称詞に関する研究は、学会で2回の発表を行ったが、まだ論文にするには至っていない。自称詞が何を指し示しているのか、それを子どもが理解すること、それがとりも直さず「自己」を形成することである。自称詞を用いるという言語ゲームがどのように習得されていくのか、生後1歳9ヶ月

までのデータを整理し終わったところである。自己の鏡像を自分の名前で名指すことができることは、それだけで自己形成の指標とみなすことが不十分であること、自己の鏡像理解を安易に自己形成とみなしてしまう従来の諸研究の不十分さが明らかになりつつある。生後2年目の後半、自己を時間的展望のなかで役割存在として位置づけることができるようになったとき、自分の名の真の理解と「自己」なるものの誕生を告げることが可能になると思われるのである。それを示す処理されたデータを手に入れることができたことも今回の研究の成果である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 麻生武 2012 子どもは「父や母」という人称語をどのように獲得するのか? 京都国際社会福祉センター紀要「発達・療育研究」, 28, 3-17. 査読無

[学会発表] (計4件)

- ① 麻生武 2013 子どもは「自分の名」をどのように学ぶのか? (その2) 日本発達心理学会第24回大会発表論文集 p. 373. (2013. 3. 16 明治学院大学白金キャンパス)
- ② 麻生武 2012 子どもは「自分の名」をどのように学ぶのか? (その1) 日本発達心理学会第23回大会発表論文集 p. 165. (2012. 3. 9 名古屋国際会議場)
- ③ 麻生武 2011 “イタイ”ということばの獲得を巡る諸問題. 日本理論心理学会第57回大会発表要旨集 p. 25 (2011. 10. 30. 岡山大学教育学部)
- ④ 麻生武 2011 子どもは「イタイ」ということばをどのように学ぶのか日本発達心理学会 第22回「大会発表論文集」 p. 208. (2011. 3. 25 東京学芸大学)

[図書] (計2件)

- ① 原田彰・望月重信(編) ハーベスト社「子ども社会学への招待」2012 (麻生武 分担執筆 pp. 9-29. 子ども社会への道: 生後2年目における「他者」との出会い.)
- ② 中西智海先生喜寿記念文書 永田文昌堂「人間・歴史・仏教の研究」2011 (麻生武 分担執筆 pp. 59-76. 「イタイ」ということばの獲得の謎.)

[産業財産権]

#### ○出願状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

#### ○取得状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]

ホームページ等  
なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

麻生 武 (ASAO TAKESHI)  
奈良女子大学・人文科学系・教授  
研究者番号: 70184132

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし